

有史以来の動物と人間の関わりが
すべてわかる新しい動物図鑑

日本人 と 動物 の 歴史

全3巻

▼著 ▲小宮輝之
上野動物園元園長

ゆまに書房



日本人と動物との独自の関わりの歩みをビジュアルに紹介します。

イヌやネコ、ウマ、ウシ、ウサギなど私たちの生活に身近に存在する家畜や、タヌキ、イノシシ、クマ、クジラなど人間の生活域と離れて生息している野生動物、さらにはニワトリやスズメ、トキなどの鳥たちはいつごろから日本に生息してどのように私たちと関わってきたのでしょうか。上野動物園元園長が、従来の動物図鑑とは異なり、民俗学的・歴史的観点から日本人の生活と関わりの深い約50種類の動物たちを、文献や昔話、伝説、様々なエピソードを交えて面白く紹介・解説します。昔描かれた図版や写真を豊富に取り入れていますので、小学校高学年から一般の方まで幅広い方々に楽しんでいただけるシリーズです。

◆日本人と動物の歴史 ① 家 畜

第1巻では、人との関わりが深い家畜について取り上げました。長きにわたり人の生活を支えてきた家畜について、起源や日本への渡来など、歴史をたどります。家畜は身近な存在なので、ふつうの動物と思われがちです。しかし、5,000種近い哺乳類の中で、家畜といわれる動物は10～20種しかいません。人類の長い歴史の中で、多くの野生動物を家畜にしようと捕まえたり、飼ったりしたはずなのに、家畜になったのは1%にも満たない動物たちなのです。人類のパートナーとなり、食料や衣料を提供してくれる家畜たちは、実はふつうの動物ではなく、例外的で特殊な動物だと思います。私自身が実際に経験したことも交えて、家畜になった動物について触れたいと思います。

縄文時代からの日本人のパートナーであった日本犬、古墳時代から約1500年にわたり日本人の生活を支えてきたウマやウシなどの日本在来の家畜たちは、経済性優先の世の中では活躍できず、姿を消しつつあります。日本人と日本の家畜について、今も細々と残っている日本在来の家畜の現状も紹介します。(本書「はじめに」より抜粋)



イヌ

イヌは世界最古の家畜

イヌは1万5000年以上も前に家畜化された、最古の家畜です。イヌの祖先については諸説ありましたが、最近のDNAの研究でイヌとオオカミのDNAがほとんど同じであることがわかりました。多くの家畜が食料として家畜化されたのに比べ、イヌは番犬や狩猟など人間のパートナーとして家畜化された点で、人類にとって特別な動物といえるでしょう。イヌは人類にとって最初の家畜として長い歴史を刻んできました。小さなチワワから大きなセントバーナードまで、すべてオオカミの子孫です。氷河期が終わった1万2000年前ごろの西アジアの道跡からイヌの骨が出土しています。イヌの祖先は小型のアラビオオオカミやインドオオ



イヌの祖先のひとつアラビオオオカミ



オオカミの面影を残すイヌ、アラスカ・マフムート

本文見本
約39%に縮小

縄文人の重要なパ

イヌが集落の残飯をあさる掃捨屋だったころは、人はイヌを捕えて食べたり、皮をはいたりして利用していました。イヌが狩猟犬として狩りを手助けするようになる中石器時代の道跡のイヌの骨からは、人に食べられた形跡が残り、人のパートナーとなったと考えられています。日本のイヌの最も古い骨は、縄文遺跡の神奈川県夏島貝塚から発掘された約1万年前のもので、縄文時代の道跡からは人のお墓の横に埋葬されたイヌの骨が出てきます。狩猟採集生活をしていた縄文人にとってイヌは大切なパートナーだったのです。狩猟犬は今も犬犬より少し小型で、鼻筋の通ったキツネ顔でした。柴犬はノウサギやキツネで活潑な気分で、縄文犬の面影を残しています。キツネ顔の狗(動物の口先)の長い柴犬を系統的に繁殖させ、縄文柴とよばれる縄文犬に似た顔つき・体形の復元縄文犬もつくられています。紀元前4世紀ころから、日本



モルモット

モルモットは食べるためにつくられた

モルモットという、実験動物の代名詞、そしてかわいいペットというイメージが浮かびます。もともとモルモットは、ウシやブタと同じように食肉用の家畜だったといっても信じない人が多いと思います。モルモットは、原産地の南アメリカでは食用に飼われていたのです。インカの道跡や遺物の研究から、紀元前1000年の昔からインカの人々といっしょに生活していたことがわかっています。現在でもペルーやボリビアのアンデス山麓の農村ではモルモットは、大切な食用家畜です。モルモットは16世紀末にヨーロッパにもたらされ、英名はギニア・ビッグとつけられました。インカ帝国を征服したスペイン人は南アメリカの物産を、西アフリカのギニアを経由してヨーロッパに運



『本草図説』に描かれたモルモット

子ブタのような動物」という名がつけられてしまったのです。たしかに、モルモットの尾のないお尻は、何となく子ブタのお尻に似ていますね。日本でのよう方にも混乱があります。江戸時代、1843(天保14)年にオランダ船で渡来したのが最初で、オランダ語のマルモットがなまって、モルモットとよ

『本草図説』には三毛の個体が描かれ、ホルホット蘭産すなわちオランダ産と書かれています。ただ、マルモットは本来ヨーロッパアルプスなどに生息する地リスのなかまであるマーモットを指す言葉です。実際にマーモットとの混乱を避けるためテンジクネズミという名をつけられました。テンジクは天竺と書きインドのことで、ヒマラヤにもマーモットはいいますが、それほど厳密なものではなく、おそらく西方からやって来たネズミという

くらしい意味でつけた名前でしょう。モルモットはネズミのなかまですが、ほとんど跳びはねることがなく、低い欄で飼うことができます。アンデスの人々は、モルモットを小屋や欄に閉じ込めるのではなく、家の周りの草を食べさせながら、家にすみつかせ、放し飼いのようにして飼っています。食べたいときや、お客さんがあるときに捕まえて、料理するのです。その味は、なかなかおいしいと評判でした。

モルモットはソウに並ぶ人気者

私が井の頭自然文化園に勤めていたある月、20種541頭の哺乳類が飼われていました。そのうち273頭がモルモットで、哺乳類の半分を占めゾウのはな子と並ぶ人気者でした。人気の秘密は、子どもたちがまたいで入れる低い囲いで飼っていたので、自由に入って直接抱いたり、えさを与えたりすることができるからでした。ペットを飼えない住宅事情から、休みのたびに通ってくる子もいました。



クイ

用の48センチ、3キロもある巨大なクイ

本文見本
約52%に縮小

ネズミの天敵としてネコの存在があったのです。西洋から導入されたラットもドブネズミのアルビノですから大黒ネズミと同じです。洋の東西で別々に家畜化され、西洋では実験動物、日本では貴ばれ

る大黒ネズミになりました。北斎が描いた『塙熊と鼠』の2匹のネズミは尾が長く耳が大きく目は赤くないのでクマネズミをモデルにして描かれた大黒天の使いかもしれません。



『塙熊と鼠』葛飾北斎



『鼠大黒』白隠慧鶴(大阪新美術館建設準備室所蔵)



『新板なずみのたわむれ』歌川国政

ペットとなったネズミ



西洋種ハツカネズミ

本文見本
約52%に縮小



『珍獣鼠育草』に載っているいろいろな毛色のハツカネズミ



豆斑の祖先種ハツカネズミ



江戸庶民のペットだった豆斑

『珍獣鼠育草』という飼育書まで刊行されています。いろいろな毛色のハツカネズミが紹介され、メンデルの法則の発見により1世紀も早く、遺伝的な組み合わせ方法がのっているのです。この中の豆斑とよばれているネズミは、現在ペットとして普及しているバンダマウスです。豆斑は日本から100年ほどの間、姿を消していました。江戸時代後期にヨーロッパに持ち出された豆斑が、ジャバニーズマウスとよばれて飼い続けられ、1987(昭和62)年に里帰りしました。里帰りし

た豆斑のDNAを調べると、日本のハツカネズミと同じでした。豆斑は、江戸時代に日本の野生ハツカネズミからつくられたものだったのです。ジュウシマツやヒメダカも日本で江戸時代につくられたもので、小動物の飼育は江戸庶民の楽しみだったのでしょう。

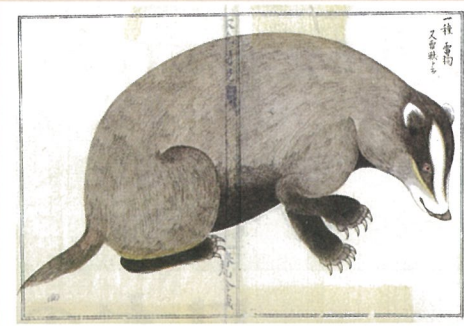
なお、本書の2巻(野生動物)では、家畜ではなく、野生動物としてネズミについて書いていますので、そちらもあわせてお読み下さい。

ラットとマウス 13

◆日本人と動物の歴史 ② 野生動物

第2巻では、日本人と野生動物の付き合いの歴史をたどります。縄文時代の人々は身近な動植物を利用して、1万年以上の長い期間にわたり生活を持続してきました。野生動物の肉は食料であり、毛や皮は衣料にし、骨や角で道具をつくりました。野生動物は神からの授かりものとしてまつり、感謝の気持ちで利用してきたのです。弥生時代以降も野生動物をはじめとする自然の恵みに対する感謝の気持ちを持ち続け、日本各地でいろいろな行事がおこなわれてきました。

日本に生息し、日本人の生活を支えてきた野生動物、とくに哺乳類が中心ですが、昔から未知なる不思議な動物として日本人を熱狂させた外国産の代表的な動物についても触れました。ゾウ、ライオン、キリンの3種は「動物園の三種の神器」といって、動物園になくってはならないスター動物とされてきました。1882(明治15)年に上野動物園が開園してから25年後の1907(明治40)年に上野動物園ではこの三種の神器がそろったのです。その後、各地に動物園ができ、多くの動物園でこの3種が飼われ動物園を支えてきました。1972(昭和47)年に上野動物園はジャイアントパンダを迎え、一躍人気者になりました。国民を熱狂させた野生動物としてトラを含めて紹介します。(本書「はじめに」より抜粋)



◆日本人と動物の歴史 ③ 鳥

第3巻では、鳥と日本人の歴史をたどります。ニワトリやアヒルなどの家畜化された鳥を家禽とよびます。家禽も第1巻で、家畜として扱うこともできますが、人との関わりの深い鳥の代表として本巻で紹介します。日本の歴史の中で昔から登場する鳥類もたくさん知られています。人の生活が豊かになり余裕ができると、人は動物を飼ったり、植物を栽培したりして楽しむようになります。江戸時代に和鳥とよ

んだ日本の野生の小鳥や外国から輸入された鳥を飼育する「飼い鳥文化」が花開いたのも、平和な時代だったからではないでしょうか。外国からもたらされた珍しい鳥、美しい鳥、巨大な鳥など、日本人を楽しませ、おどろかせてきた鳥についても紹介します。(本書「はじめに」より抜粋)



日本人 と 動物 の 歴史

全3巻

[著] 小宮輝之 上野動物園元園長

2017年9月
刊行開始

●各巻定価：本体2,800円＋税
(揃定価：本体8,400円＋税)
ISBN978-4-8433-5221-2 C0639
B5判上製／オールカラー
カバー装／平均54頁



*カバーデザインは一部予定を含みます。

●①● 家 畜

ISBN978-4-8433-5222-9 2017年9月刊行予定

●②● 野生動物

ISBN978-4-8433-5223-6 2017年10月刊行予定

●③● 鳥

ISBN978-4-8433-5224-3 2017年11月刊行予定

本書のおもな特色

- 日本人と動物との関わりを、豊富な図版や写真を交え、オールカラーで紹介。
- イヌからクジラまで、およそ50種類の動物たちが登場します。
- 主要な3つのテーマで、それぞれの歴史や背景を分かりやすく解説。
- 動物との関わりを通して、日本の習俗や風習、文化なども学ぶことができます。
- 日本ならではの動物にまつわる面白いエピソードなども紹介します。

好評発売中

ビジュアル 日本の鉄道の歴史 全3巻

梅原 淳 著 ●各巻定価：本体2,800円＋税 (揃定価：本体8,400円＋税) B5判上製／オールカラー／平均50頁 ISBN978-4-8433-5118-5 C0665

ビジュアル 日本のお金の歴史 全3巻

●各巻定価：本体2,500円＋税 (揃定価：本体7,500円＋税) B5判上製／オールカラー／平均46頁 ISBN978-4-8433-4793-5 C0633

- ◆①明治～大正前期 編
- ◆②大正後期～昭和前期 編
- ◆③昭和後期～現代 編

- ◆飛鳥時代～戦国時代 井上正夫 著
- ◆江戸時代 岩橋 勝 著
- ◆明治時代～現代 草野正裕 著

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBUN

〒101-0047
東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

● 特におすすめします 小学校高学年から一般の方まで。
学校図書館、公共図書館など各種図書館。動物好きの方など。

ご注文書

ゆまに書房 Tel.03(5296)0491/Fax.03(5296)0493 年 月 日

日本人と動物の歴史 全3巻

揃定価：本体8,400円＋税 ISBN978-4-8433-5221-2 C0639

① 家 畜	定価：本体2,800円＋税 ISBN978-4-8433-5222-9 C0639	部
② 野生動物	定価：本体2,800円＋税 ISBN978-4-8433-5223-6 C0639	部
③ 鳥	定価：本体2,800円＋税 ISBN978-4-8433-5224-3 C0639	部

お名前
ご住所

TEL ()

取扱店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

17.08/01.50000.FR